

顕彰状

岡村喬生氏は、1931年東京に生まれた。新聞記者を志して1950年早稲田大学第一政治経済学部新聞学科に入学し、友人の勧めで早大グリークラブに入部したのが運命的ともいえる歌との出会いとなった。在学中に、その豊かな声量と音楽性が早くも注目を浴び、当時のプロ合唱団のなかで最高峰というべき東京放送合唱団に入団、音楽家としての道を歩みはじめた。1959年にはNHKが招請したイタリア歌劇団公演におけるヴェルディ『オテロ』のモンターノ役に抜擢されソロ歌手としてのデビューを果たした。そして同年にはイタリア政府給費留学生として現地にわたり、ローマのサンタ・チェチーリア音楽院で研鑽を積むことになる。1960年にはイタリア・ヴィオッティ国際音楽コンクール声楽部門で金賞を受賞、さらにフランス・トゥールーズ国際声楽コンクールでは優勝の栄冠に輝いた。氏は、ほぼ同時期に国際舞台で活躍しはじめた小沢征爾氏や豊田耕児氏とともに日本人音楽家の優れた力を本場ヨーロッパの人々に強く印象づけた。

その後の氏の活躍は文字通り目を見張るものがある。イタリア、フランス、スペイン等でコンサート及びオペラに数多く出演した後に1966年オーストリア・リンツ市立歌劇場の第一バス歌手の地位を得て、本格的にオペラ歌手としての活動を開始した。その後岡村氏は1971年にドイツでも屈指の名門ケルン歌劇場の第一バス歌手に転じ、翌年にはドイツ最高峰のオペラハウスであるバイエルン国立歌劇場で、バスの深い声質と複雑な性格表現を要求される難役中の難役ムソルグスキーの『ボリス・ゴドゥノフ』のタイトルロールを歌い圧倒的な評価を受けた。その他にもモーツァルト『魔笛』やヴェルディ『ドン・カルロ』等の主要なバス役をほとんど演じている。またシューベルトの歌曲集『冬の旅』を中心にリートリサイタルを度々催し、リート歌手としての名声も次第に高まってきた。

そして1979年に20年に及ぶ滞欧生活を終えて帰国した後は、音楽活動の傍ら、テレビ番組への出演、執筆と旺盛な活躍を続けていることはよく知られている。氏の音楽家としての活動は二つの面から評価することが出来る。一つはすでに触れたように、戦後における日本人音楽家の国際的な活躍の先鞭をつけた一人であったということであり、もう一つは、天性を兼ね備えた芸術性と大衆性の絶妙なバランスである。氏の歌唱が芸術的に大変優れたものであることはいまでもなく、それがいたずらに高踏的な芸術性の誇示ではなく、幅広い大衆性、親しみやすさと結びついているところに氏の真骨頂がある。ともすれば教養主義的な堅苦しい受けとめ方になりがちなクラシック音楽のすそ野を広げるのに氏は大きな力となった。

最後に、音楽大学出身者が多い日本音楽界にあって、早稲田大学出身の岡村氏が活躍してきたことは、早稲田大学にとってまさに快事ともいえるべきである。そして専門の芸術学部を持たない早稲田大学からも氏のような世界的な芸術家が生まれたという事実は、早稲田大学の持っている底力を示すとともに、現在も数多くいるであろう芸術家志望の早大生にとって大きな励みとなっている。

以上の業績に鑑み、早稲田大学は校友岡村喬生氏を早稲田大学芸術功労者として永くその栄誉を顕彰するものである。

2002年3月25日

早稲田大学